

(4)

野心家 J. Shukla

今回は、Maryland 大学に移り、総勢 15 名の COLA を発足させ、着々と地歩を固めつつある J. Shukla に話を聞いてみました。

問：まず経歴を聞かせて下さい。

—19歳と半年で、大学の地球物理学科の修士過程を卒業しました。石油探査をやっていました。

問：それが何故気象学を？

—それは、もう少し歴史を前にさかのぼらないと分かりません。私はインドの貧しい村に生まれました。周り 10 マイル程には、道もなく、電気もないという状態でした。そして、小学校では、全く、理科という授業がありませんでした。ですから、中学に入るためにもう少し広い地区の学校に行く時、父親が、小学校の全ての理科の本を買って来てくれました。そこで、夏休みの一夏でそれを読んで、試験を受けて通った様なわけです（学制については、インドの状態が良く分からないので、年齢を参考にして、小学校・中学校としておいた。Shukla は、grade 1~grade 10 を、no science で過ごし、grade 11 に進む時 (13.5 歳) それを勉強したという。そして、grade 11, 12 が intermediate で、13, 14 が Bactechler, 15, 16 が修士というわけである。だから、19.5 歳で master となるわけである）。Geophysics を選んだのは、それが、唯一、奨学金の出る学科だったからです。

大学を卒業して、石油・天然ガス公団に入りました。そこに入って 6 カ月位勤務していたら、プーナの熱帯研究所から、面接に来いという手紙を受け取りました。職を捜す時に、いろいろな所に願書を出しておいたので、それを見て来たのでしょう。私は、石油公団がやっている仕事が面白くなく、プーナで、採用してくれるというので、プーナに移りました。私は、研究がやりたかったです。6 カ月で移ったので、公団には給料を返済しなければなりません。貰った給料は使ってしまったので、母親が借金をして返済しました。です

から、プーナに移った時は、大学で、meteorology の授業を一回聞いただけで、全く、気象学の知識を持っていませんでした。

プーナでは、誰も教えてくれる人がなく、独りで、気象学を勉強していました。最初に読んだ本は、Glossery of Meteorology でした。そのうちに、一人で、Barotropic model などを作って計算するという、所長から、米国と日本へ勉強に行っていないかという話があり、NMC へ行きました。そこで、新田尚博士に会いました。その後、日本に行き、岸保先生と新田さんから、始めて気象学の手ほどきを受けました。その時行った研究が、vertical coupling の研究でした。そうしたら、岸保先生が、面白いから、1968年の数値予報シンポジウムに発表しろ、と勧めて来れました。そこで、1968年のシンポジウムに提出することにしました。それは、Charney の議論を criticize した論文で、私は、その時まで、Charney がそんなに有名とは全く知りませんでした。シンポジウムに参加して始めて、彼がそんなに有名であることに気がつきました。そこで、非常な pressure を感じ、あがってしまいました。

私は不断でも早口なのですが、その時は、非常にあがっており、chairman が何回もやって来て、“ここには、日本人も多く居るのだから、もっとゆっくり話して下さい”と注意してくらいます。発表が終わって、質問の時になり、誰も質問する人がいないのでほっとして帰ろうとすると、やおら Charney が立ち上がり、4 つも質問をしました。そのあと、Charney は、私をつかまえ、色々説明してくれました。その後、ホテルまで連れて行って来て、又、彼の paper の原稿を渡してくれて、更に詳しく説明してくれました。数多くの人が彼と話したくて彼を取りまわっている中で、そんなことにかまわず、説明してくれた Charney に感激しました。その後、3 年間もインドに居て、その内の研究をまとめて、学位をとりました。しかし、どうしても、Charney のところで勉強したくなり、1970年に、Charney に手紙を書きました。Charney から返事は来ませんでした。Phillips から MIT の学生として来いという手紙を受け取り、アメリカに渡りました。

私の立場は奇妙で、もう既に、学位を持っていたので、Charney は、post doctoral で良いのではないかと、いいましたが、私は、学生をやりたいと、学生として卒業しました。Charney や、Phillips、Lorentz の授業を受けました。Charney が、サバティカルで一年イスラエルへ行った時は、GFDL の Dr. Manabe が、adviser

でした。その後、Post Doc. でも、GFDL へ行き、Dr. Manabe のところに居ました。私の人生では、大事な時に、日本人に、非常に、世話になるということが起きています。そのあと、1977年に、MIT の faculty になりました。やがて、1979年に、GLAS に移り、そして、1983年に、COLA が出来たので、Maryland 大学に移って来ました。

問：どんなことに興味がありますか？

——現実の気候の予測に興味があります。一か月から季節予報、モンスーンの予報や、coupled system の予測可能性に興味があります。

問：今は、何をすべきだと思いますか？

——もっとモデルを良くすること (couple model を含めて) が急務だと思います。気象学の研究には、良いデータと良いモデルが不可欠ですが、現在のモデルはそれらにみあうだけの十分な能力を持っているとは思われません。10年位努力して、realistic な simulation が出来るようになったら、それを使って研究をすれば良いでしょう。

問：今後、どの様なところを強化してゆくべきだと思いますか？

——もう少し、数学や物理学との接触を強める必要があると思います。例えば、非線形波動など、その分野で発展した成果をもっと取り込んでゆく必要があるのではないかと感じています。

問：若い人達に一言。

——最近、アメリカでは、若い人達を科学にむかわせることがむつかしくなっています。しかし、気象学は、科学的に見て興味ある問題であると同時に、社会的に見ても非常に重要であるという独特の性格を持っています。非常にやりがいのある仕事であると思います。

「貧しきインドの寒村に生まれ、花の MIT へのし上がってゆく success story、毀譽褒貶は世の習いとて、いろいろという人は多かれど、男 Shukla よどこへ行く」という感じにさせる interview でした。不断は非常に「強い」Shukla ですが、合い間合い間に、かつての「必死に勉強していた頃の青年 Shukla」の面かけがうかがわれて、なかなか興味深いものでした。今後の活躍を期待したいものです。

(住 明正)

第13回レーザセンシングシンポジウム要項

主 催：レーザ・レーダ研究会シンポジウム実行委員会

(実行委員長：九州大学 前田 三男)

協賛 (予定)：電子情報通信学会、電気学会、応用物理学会、分光学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、気象学会、測地学会レーザ学会、リモートセンシング学会、計測自動制御学会、大気汚染学会、光学懇話会

開催日時：平成元年10月2日(月)・3日(火)

場 所：〔1日目〕九州大学総合理工学研究科
レーザ・応用プラズマ計測実験棟
〒816 福岡県春日市春日公園 6-1
(TEL. 092-573-9611)

〔2日目〕大丸別荘

〒818 福岡県筑紫野市大字武蔵二
日市温泉
(TEL. 092-924-3939)

発表申込締切：平成元年6月30日

発表原稿締切：平成元年8月21日

参加申込締切：平成元年8月31日

(原稿はA4版、2ページまたは4ページ。原稿用紙は発表申込いただいた方にお送ります。オフセット印刷)

発表申込先〒812 福岡市東区箱崎 1-10-1

九州大学工学部電気工学科

前田 三男

TEL 092-641-1101 (内線5301, 5321)

FAX 092-631-2790